日野町人権・同和教育推進協議会　広報紙
人権のまち ひの
2012年11月

「私とあなた」から「あなたから私」へ
金子みすゞさんの詩を通し、まなざしを変えてみませんか

▼人権啓発講演会及び第37回日野町人権・同和教育研究集会

2012年10月19日、人権啓発講演会と町人権・同和教育研究集会が町文化センターで開かれ、人権啓発講演会では、金子みすゞ記念館館長矢崎節夫さんの講演、研究集会では、地域課題から人権尊重社会の仕組みを考えるシンポジウムが行われました。

矢崎 節夫（やざき せつお）（金子みすゞ記念館 館長）

1947年（昭和22年）東京生まれ。早稲田大学英文学部卒業。大学在学中より童謡・童話の世界を志し、童謡詩人の佐藤義美、まどみちおに師事。
自身の創作活動の傍ら、学生時代に出会った金子みすゞの作品を探し続け、16年ののち埋もれていた遺稿を見つけ『金子みすゞ全集』出版。
2003年（平成15年）4月、金子みすゞ記念館（山口県長門市）館長に就任。

◆人権啓発講演会
みんなちがって、みんないい。
― 金子みすゞさんのうれしいまなざし ―

人権啓発講演会は、金子みすゞ記念館館長の矢崎節夫さんが「みんなちがって、みんないい。－金子みすゞさんのうれしいまなざし－」と題して話されました。

「これまで私たちは『私とあなた』という自分中心のまなざしで生きてきたのではないか」と矢崎さんは会場に問いかけ、この講演でそのまなざしを変えてほしいと、会場を包み込むようなやさしい口調での講演でした。

矢崎さんは「まなざし（生き方）を変える喜びは、これまでの『私とあなた』というまなざしから、『あなたと私』に変えること」と訴えます。自分中心だった生き方から、相手に寄り添い、理解する生き方に自分自身が変わることの大切さを話します。

「優しいまなざしは受け入れて寄り添うことで、その優しさは心がこだまし合っていないと相手に届いたことにならない」と一人では生きていけない、友だちがいないと何もできないことを参加者に諭し、金子みすゞさんの詩を紹介しました。

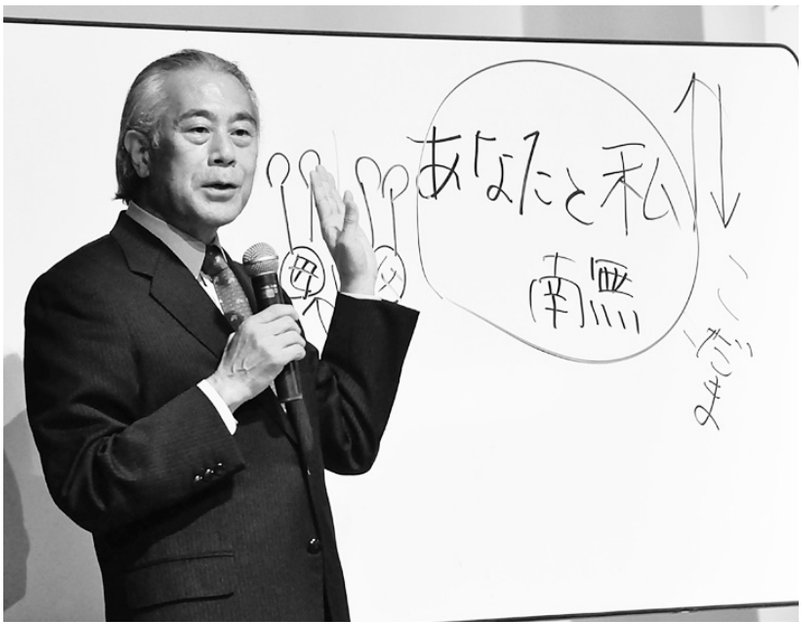
こだまでしょうか

「遊ぼう」っていうと
「遊ぼう」っていう。

「馬鹿」っていうと
「馬鹿」っていう。

「もう遊ばない」っていうと

「遊ばない」っていう
そうして、あとで
さみしくなって、
「ごめんね」っていうと
「ごめんね」っていう。
こだまでしょうか、
いいえ誰でも。



会場に訴えかける矢崎さん

この詩はテレビで流れたことから、とても有名で、金子みすゞさんを知るきっかけにもなっていると話すと、会場からは大きくうなずく参加者の姿があちらこちらで見えました。

矢崎さんは「子どもが痛くて分かってほしくて『痛い』と言ったときに、大人が痛くない、痛くないというのではなく『痛いね』や『痛いの、痛いの、飛んでいけぇ』と子どもの気持ちを受け入れること。こだまして寄り添うことで、子どもの痛みは半減していきませんか」と会場に投げかけると、参加者は笑顔を見せました。

「差別は、自分が優先だからするのであり『私とあなた』というまなざしを変えない限りなくならない。それに対し『あなたと私』という、あなたがいるから私は生きていけるというまなざしで生きている人は、相手を丸ごと受け入れる優しさがあり、心がこだまし合う」と、矢崎さんはいかにまなざしを変えることが大切か、今後、参加者のまなざしが変わることを期待しました。

金子みすゞさんは、本名を金子テルといい、1903年（明治36年）、山口県大津郡仙崎村（今の長門市）に生まれました。大正末期に優れた作品を発表し「若き童謡詩人の中の巨星」と称された童謡詩人ですが、1930年（昭和5年）、26歳の若さで亡くなりました。

心を打つ矢崎さんの話に参加者は感動